
書評

西垣 通 編・著

『基礎情報学のフロンティア

——人工知能は自分の世界を生きられるか?』

(東京大学出版会, 2018年, 菊判, vii+187頁, 4,800円+税)

名古屋大学名誉教授 米 山 優

Professor Emeritus, Nagoya University Masaru YONEYAMA

西垣通氏を中心に展開しつつある「基礎情報学」の最先端を知るために、必要にしてかつ十分な著作である。

リーダーとしての西垣氏が、まえがき、第1章、そして最終章である第8章の中で、文理融合型思考の典型としての基礎情報学の展開の必要性を、人工知能との密接な関連の下で説得的に語っている。

これらの章に挟まれた各章では、オートポイエティック・システムの一つであるHACS(階層的自律コミュニケーション・システム)に基づく基礎情報学的な研究が、社会心理学や情報倫理、そしてメディア論などといった分野に関して、様々な仕方ですべて行われているのを展望することができる。

なぜオートポイエティック・システムなのか? それは、ジョン・フォン・ノイマンが推進したような情報についての考え方の総体を「情報処理パラダイム」と呼び、それがもたらすものを一種の「人間機械論」と断じた上で、そのパラダイムの知的不備を批判し、より正確に実在世界へ接近することを探究していくためである。「ネオ・サイバネティクス」と総称される理論群の中にこ

の基礎情報学も含まれるのであるが、「オートポイエーシス理論」もまた含まれる。後者を明確に取り入れながら基礎情報学自体が展開する。ではなぜ「ネオ・サイバネティクス」と呼ばれるかと言えば、「情報処理パラダイム」には観察者の視点についての洞察が欠けていることを機縁に、システムによる観察という行為をさらに観察する「二次観察」が重視されるからである。すべてを人間機械論的に割り切るのではなく、観察者として〈機械ではない生命体〉を自律システムとして視野に取り込もうとするわけだ。そのために、むしろウィナーの立場に近い議論が展開されるのであるが、彼の古典的なサイバネティクスにおいては、当の自律システムの概念が明確でないため、それを明確にしていく中で成立した「ネオ・サイバネティクス」をベースに基礎情報学は発展するということである。

重要なのは、この自律システムと他律システムというものが、視点の採り方によって変わるものだという事だ。HACSの特徴は階層性にあり、上位の自律システムの構成素の形成に寄与する下

位の自律システムは、上位の自律システムの視点から眺めると自律性を失い、他律システムとして観察されるというわけである。何をあるとき自律システムと見なすかが積極的に問われるということである。たとえば、ある会社を自律的システムと見なすとき、社内でおこなわれるコミュニケーションを産出する社員それぞれは、あたかも言葉を話すロボットのような他律システムとして観察されるが、一人ひとりの社員は思考する主体だから、その心という視点に立つと、むしろ自律システムとして作動しているという事態が例として引かれている。より抽象的に言うと、社会システムの観察者たる視点からすれば、個人には拘束が働いているのに対して、その個人に寄り添う視点からするとオートポイエティック・システムとしての心的システムが立ち現れるという事態である。他律と自立とは両義性があるということに他ならない。

この両義性に関わる重大問題として「視点の移動」という事態があることに注意しよう。「視点の切り替え」とも本書の中では言い換えられる。要するに、「立場に立つ」とか、「観点に立つ」とか、「相手の身になって考える」とか、あるいは「側面」とかいうことの基礎づけの問題である。これは、「心的システム」と「社会システム」との切替にも、またその上位に「超-社会システム」としての「マスメディアシステム」を置く場合にも、さらには「心的システム」という語は用いず、あえて「身体・無意識システム」と「意識システム」の2つに分けて議論を進める場合にも、問題となる事柄である。本書の中の多くの論考はこの切替の可能性を自明のこととしている。けれども、さすがに西垣氏はその可能性についていくらかの考

察を展開する。主観世界論の「唯我独尊論」という欠点を防ぐための「二次観察」という論点だ。実際、それに関連して現象学の用語である間主観性 (inter-subjectivity) まで登場する。しかしながら、この事態は、現象学における他我の類推問題へとコミットしてしてしまうことも意味している。言うならば、この点を追究していくと、現代哲学の問題に本当に入り込まざるを得なくなるのである。

要するに、「視点の移動」問題は、HACSの重要な性格である階層性に密接に関わっているからには、こうした議論は避けようがない。さもないければ、倫理の問題を語るときの「正義の倫理」と「ケアの倫理」の区別も、意識システムの中での自由意志の立ち上がりも、その根拠を万全な仕方では語ることができない。感情移入論では弱いということだ。それを超える手立てはないのか？ マイケル・ポランニーの「棲み込み (in-dwelling)」を持ち出して議論することもできようが、暗黙知に関しては本書ではあからさまに展開されていない。

最終章で、まさに哲学的な議論が展開され、現代哲学の「思弁的実在論」にまで、「汎用人工知能」との関連で触れられているのは評者としては嬉しい。その主要な論者としてのメイヤサーを批判する際に、「科学者も一般人もやすやすと受諾はできない」という仕方での拒絶を見たりするのだが、むしろ、「やすやすと受諾はできない」のはなぜなのか考えてみるのが、評者である私のむしろ好む姿勢だ。その上で、例えば、福居純氏が展開するような、瞬間の独立性を語るデカルトの「連続創造説」や「永遠真理被造説」までを射程に入れた「思弁実在論」批判の議論を期待するのは無い物ねだりだろうか？